

タイトル	観光発展史におけるマスツーリズムの意義
著者	郭，倩；GUO，QIAN
引用	
発行日	2020-04-01

氏名・（本籍地） GUO QIAN 郭倩（中国）

学 位 の 種 類 博士（商学）

学 位 記 番 号 博（商学） 甲第 8 号

学位授与の日付 令和 2 年 3 月 31 日

学位授与の条件 規則第 4 条第 1 項該当

学 位 論 文 題 目 観光発展史におけるマスツーリズムの意義

Significance of Mass Tourism in the History of Tourism
Development

論 文 審 査 委 員 主査 教授 伊藤昭男

副査 教授 佐藤博樹

副査 教授 西川博史

I. 論文内容の要旨

1 本論文の目的

郭倩氏の論文表題は、観光発展史におけるマスツーリズムの意義 Significance of Mass Tourism in the History of Tourism Development である。

本論文の研究目的は、近代社会の発展とともに変化する観光のありようを「観光発展史におけるマスツーリズムの意義」として明らかにすることである。

2 本論文の構成

各章の構成と概要は以下のとおりである。

序章「観光発展史の研究の目的と方法」においては、研究の目的、意義、視点と方法が述べられているとともに、本論文の構成が示されている。

第 1 章「資本主義の生成・発展と近代ツーリズムの成立」では、マスツーリズムという観光現象が生じる以前の観光（ツーリズム）を「前近代資本主義社会の観光」、「近代資本主義社会の成立と観光」、「帝国主義と植民地時代の観光」に区分し、考察することを通じて、資本主義社会における観光の歴史的条件を明確にしている。ここで「前近代資本主義社会の観光」においては、「旅」の範疇に止まる各種の観光形態（商人資本に付随する旅、宗教目的の旅、上流階級によるツアーなど）をヨーロッパや中国を含むア

ジアの事例について提示している。「近代資本主義社会の成立と観光」においては、重商主義時代を前近代社会として一括し、産業革命を経て資本主義の発展がイギリスにおいて実現される時代におけるツーリズム発生の諸条件および、大不況期を経て 20 世紀の帝国主義時代に入ってから観光の変容とその条件を考察している。この時期には商品経済の一層の発展による賃労働者の出現によって「余暇の誕生」から新しい観光形態が形成され、その重要な要因として鉄道の発展が見出されるとしている。さらに「帝国主義と植民地時代の観光」においては、世界市場が拡大し、移民の増加と植民地の拡大によって両大戦間期に大衆観光とマスツーリズムの萌芽が現れたとしている。

第 2 章「戦後世界の経済成長とマスツーリズム」では、第二次世界大戦後の世界システムの変容と観光との関係を「戦後世界の再編とマスツーリズムの展開」、「欧米先進国におけるマスツーリズムの発展」、「日本におけるマスツーリズムの発展」の観点から考察し、そうした変容がもたらしたマスツーリズムとその発生をもたらした歴史的諸条件を考察している。第二次大戦後、国際関係や世界が再編され、資本主義陣営は高度な成長をみせた。その中で世界人口の増加、工業化の進展、交通輸送技術（とりわけ航空輸送）の進歩および観光に関連する産業の繁栄によってマスツーリズムの規模が急拡大したこと、とりわけ欧米先進国では労働時間の短縮と所得の増加が著しく、マスツーリズムの定着につながったとしている。同じ状況は日本でも現れたが日本のマスツーリズムは海外とは異なり、主に国内旅行で発展し、海外旅行については近隣国より遠方を選び、またパッケージツアーの利用が多かったとしている。

第 3 章「グローバリズムの展開と東アジアの観光」では、マスツーリズムがグローバル時代の到来とともにさらに拡大・進化していく実態を「東アジアにおけるグローバリズムと観光」、「中国における観光の発展」、「ASEAN の国際観光市場への影響」に分け、東アジア、とりわけ中国、ASEAN（アセアン）の実態によって検証している。

20 世紀末からグローバリゼーションの展開によって国際社会と距離が置かれた地域や、植民地の歴史が長かった東アジア諸国では、大きな転機を迎え、都市化および地域統合が進展した。「東アジアの奇跡」の過程において観光は外貨獲得・国際交流・経済発展の重要な手段になっていった。中国におけるマスツーリズムは、政府が主導的で積極的に観光政策を推進し、観光行動の誘発によって経済成長とともに大きな観光市場を作り上げた。ASEAN 地域においては、インフラ整備や観光開発は地域統合・地域協力体制の形成によって進められた。こうしたことを反映して、レジャー娯楽、海外旅行など、先進国が長い期間をかけて実現してきた過程を短期間で実現したとしている。

終章「新しい観光の在り方」の意義」では、「観光社会学が指摘するマスツーリズムの問題点」、「オーバーツーリズムと「新しい観光の在り方」の意義」、「結語」に分け、マスツーリズムの問題点をオーバーツーリズムの問題を通じて指摘している。問題の指摘にあたっては、観光社会学研究に大きな影響を与えている J.アーリ、D.マッカネル、ブーアスティンのそれぞれの理論から彼らによるマスツーリズムの問題を整理した上で、観光地に

として外的要因としてのマスツーリズムは犯罪や売買春などの社会問題を誘発し文化変容や環境問題を生み出す原因となる可能性があること、国や地域が主体的に観光開発に取り組む過程においてもマスツーリズムによる発展途上国の観光地の文化や自然の崩壊問題を生じさせていることを指摘するとともに、現在の「グローバル社会」は資本主義経済が世界中に浸透して「歪んだ形」で形成された「近代世界システム」であり、南北問題や環境問題もこうしたシステムから生み出された構造的問題であると指摘している。こうした指摘から、世界規模のマスツーリズムが興隆する中、旅行商品の平準化と複数化および交通機関の進歩によって観光活動自体が空洞化しつつある。加えてオーバーツーリズムの問題として、環境汚染とゴミ問題、治安悪化および環境客のマナーの問題、深刻化する交通渋滞の問題、文化の変容の問題が生じているとしている。その上で根本的な問題であるのは、「主体」の観光客が引き続き増加しつつ、それを加速するアクセス手段としての「媒体」も進化しつつある一方、「客体」となる観光地や観光資源の自然的性質による制限から、需給バランスの矛盾が生じていることであると主張しており、それは「近代世界システム」そのものが内在する問題であるとの見解を述べている。

Ⅱ．論文審査結果の要旨

1 審査の経過

令和2年1月31日に博士請求論文が提出され、直ちに商学研究科長の下で、審査委員として、主査に伊藤昭男、副査に佐藤博樹と西川博史が選任された。令和2年2月12日に公開報告会が開催され、引き続き口頭試問がおこなわれた。審査員全員の出席のもとに本論文について申請者の説明を求めたのち、関連事項の質疑を行った。その結果、審査委員全員により合格と判定された。

2 評価

(1) 論文の主な成果

第一に、本論文の特徴でもあるが、本論文では観光現象の歴史的考察を通じて、マスツーリズムという観光現象を時代的制約性のもとでの社会現象として認識・考察している。観光客の増大の基本要因は所得の上昇であり、資本主義経済の進展と浸透は観光活動を活発化させる強力なエンジン機能を果たしてきたことが推察されるが、本論文においてはそうした点を歴史的考察から裏付けている。本論文では、マスツーリズムの展開を軸に、それ以前を「前近代資本主義社会の観光」、「近代資本主義社会の観光」、「帝国主義と植民地時代の観光」に3区分して考察するとともに、マスツーリズムの展開が見られた第二次大戦後については「欧米や日本のマスツーリズム」と「東アジアのマスツーリズム」の観点から考察している。その上で、資本主義がグローバリズムという段階

に到達している状況とマスツーリズムとの関係をオーバーツーリズムというマスツーリズムが内在する問題として認識し、「新しい観光の在り方」についての意義を問題提起している。以上のように中長期的歴史的考察の視点から現代のマスツーリズムの生成・展開を再確認し、その問題点を考察する試みはオーソドックスなアプローチではあるが現象を的確に認識し、問題点を深く考察する結果をもたらしており、研究上の成果といえる。

第二に、本論文ではマスツーリズムを交通条件の改善との関係性の中で認識・考察している。観光客の増大の基本要因には先の所得の上昇と「交通条件の改善」がある、本論文では、交通輸送技術（とりわけ航空輸送）をマスツーリズムの成立・発展における重要な要因と捉えており、これについての把握が丹念になされている。すなわち、19世紀半ばの旅客鉄道の誕生と観光地開発、自動車産業の台頭と余暇活動の活発化、船舶によるツアーの展開、航空旅行の段階的発展と国際的な観光流動の進展などが把握・考察されている。こうした交通条件の時代的変遷はマスツーリズムの生成に大きく寄与したばかりでなく、グローバルな観光展開を可能にし、マスツーリズムの隆盛を担ったことは自明であり、斬新であるとはいえない。しかしながら、イギリスなどの「大航海時代」の商業的移動から今日までの世界的規模の移動までをマスツーリズムと交通条件の改善との関連性において認識・考察したこと、またそうした交通条件の改善を資本主義のグローバリズムという動力がなさしめているという認識からマスツーリズムの進展を捉えていることでマスツーリズムの本質と問題を考察する手がかりを見出しており、視覚に独自性が認められ、研究上の成果であるといえる。

第三に、本論文では現代観光の特色であるマスツーリズムの問題としてオーバーツーリズムを指摘し、「新たな観光の在り方」を考察している。昨今のオーバーツーリズムは、「観光公害」ともいわれるように行き過ぎたマスツーリズムによる弊害をもたらしており、マスツーリズムに代表される現代観光をいかにコントロールしていくべきか、「新たな観光の在り方」をどのように見出していくかは、まさに今後の観光における大きな課題である。元来、観光現象は観光資源の存在から局所的地域的なものである。したがって、観光現象は観光客の満足を目的とするだけではなく、観光地側の満足および自然保全もまた目的としなければならないのは当然であるにもかかわらず、現代のマスツーリズムにはそのバランスを崩しかねないリスクが内在している。本論文はこうした点を指摘し、「新たな観光の在り方」を考察しており、研究上の成果といえる。

(2) 評価

上記の研究上の成果を踏まえて本論文の評価は以下のようにまとめられる。

第一に、中長期的な歴史的考察の視点から現代のマスツーリズムの生成・展開を再確認し、その問題点を考察する試みはオーソドックスなアプローチではあるが現象を的確に認識し、問題点を深く考察する上で効果的な結果をもたらしており、その考察方法に

は妥当性があるとして評価し得る。第二に、交通条件の時代的変遷はマスツーリズムの生成に大きく寄与したばかりでなく、グローバルな観光展開を可能にし、マスツーリズムの隆盛を担ったことは自明ではあるが、イギリスなどの「大航海時代」の商業的移動から今日までの世界的規模の移動までをマスツーリズムと交通条件の改善との関連性において認識・考察したこと、またそうした交通条件の改善を資本主義のグローバリズムという動力がなさしめているという認識からマスツーリズムの進展を捉えることでマスツーリズムの本質と問題を考察する手がかりを見出しており、考察視覚に独自性が認められると評価し得る。第三に、本論文は、マスツーリズムの問題の観点からオーバーツーリズムを取り上げ、今後の「新たな観光の在り方」を考察しており、ともすれば、観光現象を観光ビジネスの拡大の観点から評価しようとする研究の風潮に流されることなく、観光資源が存在する局所・地域の社会的側面への影響こそが元来重要であるとの認識を改めて喚起させるものとなっており、今後の観光研究に一石を投じるものとして評価し得る。

しかしながら、本論文は、「新しい観光の在り方」をマスツーリズムおよびグローバリズムに代表される行き過ぎた資本主義に問題を集約化する傾向があること、またオーバーツーリズムの問題現象を一般的に指摘するにとどまっており、その問題の本質に関する考察が不足しているように見受けられる。また「新しい観光の在り方」の意義を考察するにあたっては観光社会学を理論的基礎とした考察がなされているが、本論文で主導的に用いられた歴史的考察とあわせていかなる理論的基礎との組み合わせ（観光社会学のみで十分かどうか）が「新しい観光の在り方」をより深く考察していく上で望ましいかは、課題として残されているように思われる。とはいえ、これに関しては今後の研鑽を期待したい。

3 学内の手続き

提出された論文の審査ならびに文書及び口頭による最終試験の結果は、本学学位規則第7条に基づき研究科委員会で審査委員会主査から報告され、研究科委員会構成員の閲覧に供するため博士論文の閲覧を経て、令和2年2月20日の研究科委員会において、同論文を合格と決定した（同規則第8条第1項）。

その後、同年2月20日、研究科委員会が開催され、同論文について商学研究科長より、委員会の審査経過ならびに論文要旨の報告がなされ、合格とすることが承認された（同規則第10条第2項）。これに基づき、同年3月31日付にて、博士（商学）の学位が授与された。